

尾野森生さん 小説「POET」 第六十回 北日本文学賞入賞

徳島文学協会会員の尾野森生さんの小説「POET」が、第六十回北日本文学賞に入賞した。

選者の宮本輝さんに「文章の密度も素材も小説のつくりも群を抜いている」と評された受賞作は、ウェブ上で読むことができる。

<https://viewer.webun.jp/books/viewer/app/P000006>
503/2026/01/01



地球人になる

— 北日本文学賞を受賞して

尾野森生

一月下旬、贈呈式で初めて富山を訪れた。時間が許せば『螢川』ゆかりの場所を歩いてみたいと思い、往路、二十年ぶりに再読した。宮本輝の『螢川』といえ、終盤に美しく描かれるいち川の螢の乱舞がすぐに思い浮かぶ。地図で調べると、川はホテルから歩いて十分ほどで行けるようだ。

受賞作『POET』は、死者の最期の思いを遺品から読みとるといふあやしい装置を巡って、主

人公・一芯が亡き父と向き合う話である。一芯は装置が出力した父の言葉の解釈に翻弄されるのだが、『螢川』を読み返す途中、私は声をあげそうになった。死んだ父が言い残した意味不明の言葉に息子が悩む場面があったからである。列車で琵琶湖西岸を北上するにつれ、雪化粧の家々が増えていく車窓を眺めながら、私は「死者の言葉」というモチーフの系譜について思いを巡らせた。

富山は大雪だった。ホテルの十三階の部屋の窓はいち川のほうを向いているのに、大粒の雪と、のしかかる灰色の空に覆われて見えない。私はなぜか川をもう見た気になって、窓にくつつく綿雪を一瞥すると、コンビニで買ったおにぎりを開けた。

モチーフの一致よりも、私が文学賞を受賞したことのほうが奇談だ。文学は私に近しいものではなかったから。

前半生に読んだ本は両手で足りる。絵本『おつとあぶない』に始まり、『十五少年漂流記』『ボッ

コちゃん』『それから』『人間失格』『コインロッカー・ベイビーズ』……。『自分のことが書いてある』と多くの読者が思うらしい『人間失格』でさえ、私には遠いものに思えた。文学は賢い人が書いたり読んだりするもので、道端の野草のような自分とは無縁の地平にあった。

半世紀生きて、残り時間は短いと悟ったとき、不覚にも筆を執った。一芯が「地球人」になるため家を出たように、私も「地球人」になったかっただろう。書くことも読むこともいまだ拙い私が、思いがけずひとつの足あとを「地球」に残せたのは、佐々木義登先生と徳島文学協会の方々の存在が大きい。心からの敬意と感謝を捧げたい。



佐々木会長と祝賀会にて

徳島文学九号 発刊

今年も『徳島文学』第九号を発刊することができました。発刊を記念して親睦会を開催いたします。

徳島文学九号 発刊記念親睦会

評論家・編集者のアサノタカオさんと佐々木会長による対談、徳島文学協会の一年間の活動報告及び会員の活躍の紹介、書籍の持ち寄り・交換イベント「BookBook 交換会」を行います。

■開催日 八月三十日(日) 十五時

■開催方法 会場+Zoom 同時開催

(ハイブリッド開催)

■場所 徳島市シビックセンター

活動室3

■参加費 無料

※事前申込不要ですが、Zoom参加の場合はURLをご案内する必要があります。ため、三日前までに事務局までメールにてお申し込みください。



文学イベント 多数開催しています

徳島文学協会では、文学イベントを多数開催しています。今年四月には、俳人のうっかりさんが講師を務める「春の句会」が開催されました。うっかりさんによる報告記をお届けします。

春の句会

うっかり

徳島文学協会主催の春の句会で講師をさせていただきました。九名の参加で十二句の投句がありました。投句された全句に私から簡単な講評を述べさせていただきました。その一例として得点の高かった句について、私が当日述べた講評を紹介します。

陽だまりの猫のうなじに桜ふる

蒼天

なんとなく猫が寝ているのが分かりますね。とてもいいと思います。下五の桜ふるに関しては、ふる桜とした方が良いかもしれないです。ふることに注目してほしいのか、桜に注目してほしいのかによって変えてよいと思いますが、ここではおそらく桜に注目してほしいのだと思いますので、最後はふる桜が良いかもしないです。静と動でいうとこれは動ですが、静の状態を詠むなら「陽だまりの猫のうなじの桜かな」でも良いと思います。何にせよ完成度の高い一句です。

生きているといういろいろありますが、

うっかりさん 徳島新聞俳句選者に



うっかりさんが、徳島新聞の文化面コーナー「カルチャー U25」の俳句選者に就任されました。

六月二十四日の徳島新聞朝刊に、うっかりさんの抱負が掲載されました。今後のご活躍に期待したいと思います。

暑くても、寒くても、たんぼぼを見ても、寂しくても、病気や怪我をしても、俳句になります。俳句が寄り添ってくれる日常になれば世界が広がるのです。あなたと世界との繋がりを、俳句で表現してみませんか。奇抜なことをしなければならぬということはありません。俳句は己の素直さとの対話だと私は思っています。俳句を介してみなさんと対話できることを楽しみにしています。



句会の様子

「ブンガクダンギ」

開催しました

二月二十二日、小松島市立図書館と共催で文学トークイベント「ブンガクダンギ」が開催され、会場やライブ配信により多くの方々にご参加いただきました。徳島の文学活動の歴史や、今後の地方文学の展望などをテーマにトークを展開。会場やライブ配信から寄せられた質問・意見なども取り上げました。

YouTubeで
アーカイブを
ご覧頂けます



藤代淑子さん小説「花火」掲載

第二十二回三田文学新人賞奨励受賞の徳島文学協会会員、藤代淑子さんの小説「花火」が『三田文学』No.164 (二〇二六年春季号) に掲載された。



購入は三田文学ホームページから
<https://www.mtibungaku.jp/quarterly0.html>



文学イベント「私のイチオシ本」を

開催しました

一人一冊お気に入りの小説や漫画などを持ち寄って、作品の魅力をプレゼンする「私のイチオシ本」を三月十五日に開催しました。
プレゼン後の投票で、河野夏歩さんの紹介した、八起正道作・いとうひろし絵「ぼくのじしんえにつき」が最も読んでみたい本一位に選ばれました。河野さんによる同書の書評を掲載します。

ぼくのじしんえにつき

河野 夏歩

この本とはじめて出逢ったのは、かれこれ十数年前になるだろうか。

父が逝き、元氣だった母も介護施設に入り、余生はそこで長い時間を過ごすであろうというとき。私は、たまに笑顔を届けるだけの役割だった。

ある日のこと、時間合わせの為に、久し振りに市立図書館へ立ち寄ってみた。

ふと、いつもなら入らない「児童ルーム」と書かれたガラス越しの明るい部屋に足が向いてしまい、気が付くと窓際に置いてある小さな木の椅子に腰掛けていた。

窓に背を向けて座った私の前には、何冊かの絵本が飾られてあったのだが、そこで目に飛び込んできた一冊の絵本があった。

平仮名で書かれたタイトルは「ぼくのじしんえにつき」。

何やら、子どもたちが声を掛けて来るような、読んで欲しそうな気配がした為、つい手に取ってパラパラと中を

覗いてしまった。

それは絵本なのだが「SF童話」であるという点が、大人の私にも、少し好奇心をくすぐる部分があったのかも知れない。

カラフルでシンプルな表紙絵は、一見、子ども向けの内容の様にみえるが、読み進むうちにどこかリアリティーを感じ始め、いつの間にか「読んでいる自分がストーリーの中に存在してしまう」そんな魅力を含んだ絵本だった。

物語は、塾にいるときに地震に見舞われた主人公の小学生かずゆきが書く「絵日記」の形で綴られ、子ども目線で淡々と語られていく。

いつものように塾で勉強をしていたときにまさかの地震。楽しいはずだったかずゆきの日常生活は、あつと言う間に、非日常の恐怖の世界へと、取り巻く環境が一変してしまう。

大きな地震に見舞われたことで、今まで見たことも経験したこともないような苦難や恐怖の日々が始まるのだ。

自然災害であれ、人為災害であれ、一度このような状況が発生すると、大

人も子どもも関係なく狂気に翻弄されるのが常だろう。

物語の途中、かずゆきに様々な危機が訪れるのだが、そんな時、格言好きのおばあちゃんが登場して彼の心を救ってくれる。丁度、八十年代から九十年代にかけての学園ドラマに出てくる熱血先生を彷彿させるような、面白いおばあちゃんだ。昔は何処の家庭にも、または、近所に一人は居たであろう、味のある存在だ。

絵本ではあるが、全体的に、SF作品特有の怖さのようなモノが流れており、一方で要所要所に、一瞬クスツと笑ってしまいそうになる場面も、しっかりと組み込まれている。そこが、小気味良い作品になっているのではないだろうか。

私には「とても他人事とは思えない」という、緊迫感が感じられた。

もしも今、この絵日記のように大きな揺れが襲い、家の窓ガラスが突然割れて、自分の方へ破片が飛んで来たとしたならば、すぐに避難出来るだろうか。

一九九五年に起きた阪神淡路大震災からは三十一一年、東日本大震災からは十五年の歳月が経っているが、その傷は未だ癒えているとは信じ難い。

誰もが生きづらさを感じるような毎日の中で、もしも誰かが孤独を感じていたならば、この絵本を通じて「愛別離苦（あいべつりく）」という言葉や、少しコミカルなタッチのイラストも含めて、心に温もりを感じて頂けると嬉しい「私のイチオシ本」である。

【エッセイ】 地方俳壇は不毛か

涼野 海音

地元のベテラン俳人の逝去を最近知った。その俳人が指導していた句会の会員はどうなるのだろうか。高齢の会員の大半が、これを機に句会を辞めるだろう。俳句自体も辞めるかもしれない。残念ながら、大方の会員が指導者の顔を立てるために、句会に参加しているだけなのである。

ベテラン俳人が、年齢の少し若い者に後継者指名をした場合、その後継者は、以前の指導者より選句を甘くしないと、句歴が長い会員たちをまとめていくことができない。句会は、これで当面どうにか維持できるだろう。だが、「句の質」はうんと下がる。こうして厳格な選句基準を持った指導者は、だんだんといなくなる。そしていつしか句会は年配者のお話会となるのである。

また俳句団体の役職を頼りに、句会の会員を増やそうとしたところで、集まるのは時間に余裕のある年配者ばかりだろう。

そしていつの間にか、選句や指導を甘くして、初学の年配者を、結社に勧誘するだけの指導者であふれていく。句会や結社の会員を増やすために、選句や指導を甘くするのは邪道である。

残念ながら、これが地方俳壇の現状と言わざるを得ない。選句基準が低い句会に参加しても、俳句の進歩がない。

【エッセイ】 詩人尾崎豊

福島 健太郎

「大人たちは歌詞カードだけで、僕のことを判ったつもりになってる。大切なのは、メロディー、リズム。そして…」

嘗ては僕も、歌詞だけで尾崎を判ったつもりでいた。引用文と異なるのは、僕は大人ではなく少年であった。音楽を解さない僕は、今もって歌詞によって彼に接近するより外ない。彼には、歌詞のほかに、詩集もあるし、小説もある。歌詞といつても、「優れた」詩と大差ない。よって、僕は彼を文学者だと考えている。詩人として見ている。彼に「心酔」していたのは、或いは、彼が僕の「全て」であったのは、十五歳〜十八歳までのわずかな期間に過ぎないが、この頃になって過去を懐かしむ気持ちからか、また、彼の曲を聴くようになった。口ずさむようになった。中学三年の頃であったか、ある人に「尾崎豊だけはやめておけ」と忠告されたから、へそを曲げて反論したこと、今も記憶している。しかし、後になってその忠告の意味が少しだけわかった。だが、忠告を受け入れることは「逃げる」ことだと意固地になつてはねつけた。今でも意地を張っているが、尾崎の詩と僕の心境とに少し距離があるように感じるのは、僕が遅鈍になったためか。或いは、彼より十年も長く生きてきたためか。彼は早熟の人であったが、限界を迎えるのも早かった人だと言えるだろう。享年二十六。早すぎたのか、適当であつたのか、今もまだ判断できない。

ここに尾崎論、或いは、長々しい随筆を書くつもりはない。過去の「のろけ」(好いた惚れた)まで書いては僕も退屈する。僕が一番好きな曲について、短いものが書ければよい。コラムとして読んでももらえればいいし、なにか創見を書くのでもないから読み飛ばしてもらってもいい。採りあげるのは、彼が、デビューライブのオープニングに選んだ曲『街の風景』である。

街の風に引き裂かれ舞い上った夢くずが
路上の隅で寒さに震えもみ消されてく

文学も何も知らなかった少年が初めて『街の風景』を聴いた時の感動は筆舌に尽くしがたい。だが、「夢くず」とは僕のことじゃないか。この歌詞を最も理解している者はこの僕だ。僕こそ尾崎豊の理解者だ」と、心酔者にありがちな「妄想」を発症したことは今も記憶に新しい。幸か不幸か、少々頭のいけない少年であったことは確からしいが、その様な少年男女を今でも嗤う気にはなれない。むしろ、一度は発症して見るのも悪くはないとも思っている。

灰色の壁の上書きなぐった気持ちは
それぞれの在り方の空しさに震えてるんだ

文芸評論家の山下悦子氏は、『街の風景』の歌詞を「ロマン主義的な負の美学」と呼んでいるが、中学生であつた僕には、無論、その様な「器用」な言葉が思いつくはずもなく、せいぜい授業をうつちやらかして、空を眺めることくらいしかできなかった。校内を見まわる教師に「何してる」と何度咎められても、「空見てる」と無愛想な返

事を繰り返した。進学なんか考えていなかった。ただただ空しかった。

追い立てられる街の中アスファルトに耳をあて
雑踏の下埋もれてる歌を見つけ出したい

「雑踏の下埋もれてる歌」を、僕は「弱者たちの歌」と解した。今も解釈は変わっていない。聞き流される弱者たちの歌、叫び、或いは沈黙。僕は聞き捨てまいとした。ひたすら聴き入ろうとした。自分もまた弱者であることを忘れて。アスファルトの下にどんな大音楽が隠されているか。どんな真実の歌が隠されているか。僕は、アスファルトを叩く靴の音ではなく、(おこがましくも)雑踏に埋もれた歌を聴くことに、大袈裟に言えば、人生を賭けてみたいと思った。僕の雑文の根っこには、誰を書いても、この歌詞がある。

人生はキャンバスさ人生は五線紙さ
人生は時を演じる舞台さ

後年(十九の頃か)、僕の尾崎心酔はドストエフスキーやランボーによって、粉々に粉碎されてしまったが、この頃になって、彼らのことはどうでもよくなり、また、尾崎豊の曲を愛聴するようになったことは前述した。二十歳の頃から今日まで、様々な本を貪り読んできた。幾人かに惚れもした。けれども、尾崎以上に愛した人があつたかどうか。賛否の分かれる人だが、僕は正直でいたい。

心のハーモニー奏でよう
ガラス作りの歌奏でよう
無限の色を散りばめた街の風景

掲載作品募集

会員の皆さまの積極的な応募をお待ちしています。

ニューズレター「とと」

原稿はワード形式で事務局へお送りください。(送信時には件名に『とと掲載用』と入れてください)

- ◆エッセイ等 八百字以内
- ◆詩 四百字以内
- ◆短歌 三首以内
- ◆俳句 三句以内

「とと」は年二回発行ですが、一回につき掲載できるのは四作品程度です。先着順で掲載できない場合は次号に回します。

ホームページ「作品広場」

原稿はワード形式で事務局へお送りください。小説、エッセイ、評論、児童文学、詩、俳句、短歌などオリジナルの作品に限りです。

最新掲載作品

小説

「優くんネクタイ」 岡崎ゆか

作品、募集要項はホームページ
<https://www.t-bungaku.com/plaza.html>



『徳島文学 Volume 10』 二〇二七年初夏、発行。

徳島文学協会発行の文芸誌『徳島文学 Volume 10』の原稿を募集します。

徳島文学協会が年一回発刊する文芸誌『徳島文学』は、おかげさまで第 10 号発刊の運びとなりました。地方の文芸誌として類を見ない商業雑誌に匹敵するクオリティの同人誌を目指して十年。記念すべき一冊に会員の皆様の優秀作品を無料で掲載致します。ぜひ、ご応募ください。

◆応募資格

徳島文学協会会員限定

◆応募方法

全作品 **メールにて受付**

縦書きを原則とする。テキスト形式 (.txt) か、Microsoft Word (.doc, .docx) のデータを会員専用メールアドレスに添付して送付。
メールタイトルに「徳島文学 十号応募作品」と記載

◆締め切り

二〇二七年一月十日(日)

◆原稿規定

■コラム

二〇文字×六六行以内
(タイトル・著者名を除く)、テーマ不問

■一般文芸作品

小説・評論・随筆・詩・短歌・俳句など広義の文学作品、および書評などの未発表作品

◆お問い合わせ

徳島文学協会事務局／
徳島文学制作実行委員会
電話 080-6284-0296
(日曜祝日を除く九時～十七時)

詳しい募集要項は「徳島文学 2026 Volume 9」の二四八ページをご覧ください。

会員の皆さまのご活躍

会員の皆さまが受賞された文学賞をご紹介します。

文学賞を受賞された方は事務局までご連絡ください。詳細は「とと」六ページをご覧ください。

徳島新聞「ジェンダー短歌」
入選 のやまきのこ

事務局だより

前号作品は詩の片桐一彦さん、短歌のミスマアヤカさん、エッセイの福島健太郎さん、有雅瞳さん、作品広場の作品は小説の岡崎ゆかさん、ありがとうございました。これからもみなさんの作品を楽しみにしています。

「とと」：古代エジプト文明の知恵の神

「とと」に由来する。

四国大学第五回

瀬戸内寂聴青春

エッセイコンクール開催

徳島県出身で、数多くの小説やエッセイを残した作家・瀬戸内寂聴氏の文学的功績を後世に伝えるために創設された、四国大学「瀬戸内寂聴青春エッセイコンクール」が第五回目の開催を迎えます。

徳島文学協会はこの賞に協賛し、大賞作品を文芸雑誌『徳島文学』に掲載します。

詳細および応募用紙はこちらから
<https://www.shikoku-u.ac.jp/about/attempt/essay/no05/>



四国大学第七回

富士正晴全国高校生

文学賞開催

徳島が輩出した著名な作家・富士正晴を顕彰し、さらに新たな才能を発掘するため創設された四国大学「富士正晴全国高校生文学賞」は、今年で開催七回目を迎えます。

徳島文学協会はこの賞に協賛し、大賞受賞作品を『徳島文学』に掲載します。

詳細および応募用紙はこちらから
<https://www.shikoku-u.ac.jp/about/attempt/fmasaharu/no07-about/>



みんなの文芸誌 『カクヲタノシム vol.5』



ご寄稿いただいた皆様、
ありがとうございました。
ただいま鋭意編集集中です。

今秋
発刊予定

原稿データの作り方

【表記方法について】

表記方法については標準的な体裁があります。徳島文学協会が発行する『徳島文学』や『とと』では基本的に、小説やエッセイ、コラム等の原稿はこの体裁に準じて校正を行なっています。

投稿の際にはこの体裁に準じて、データを作成してください。

●数字は漢数字を使用

●感嘆符・疑問符！？
の後は全角フキ

●リーダーとケイについては「・・・」や「」ではなく「二字分「……」「」とする

文学イベント案内

短編小説講座

初心者から、短編小説の書き方を極めたい方まで、どなたでもご参加可能。参加者の作品を組上に載せて合評したり、プロの作品について講師が講義を行ったりします。

* 未完成作品の提出はご遠慮ください。

- 開催日 10月3日(土) 19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催
- 場 所 徳島県立文学書道館
- 参加費 作品提出: 会員3,000円/学生会員1,000円
非会員 30枚程度7,000円
50枚程度10,000円 ※
参加のみ: 会員1,500円/学生会員500円
非会員2,500円 ※
- 提出作品 原稿用紙50枚位まで
- 講 師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 締 切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれた小説(400字詰め原稿用紙換算 50枚程度まで)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

小説通信講座

文学賞応募の前に推敲したい方、自分の小説が第三者にどう読まれるのか知りたい方、小説の書き方に自信のない方など、文学賞の下読み経験が豊富な2名のアドバイザーが編集者目線でチェック致します。

- 受 付 毎月20日締切
○募集期間 2027年1月20日まで
○先着順受付で月2作品まで
(応募多数の場合は次月へ)
- 費 用 10,000円/1作品
同じ作品は2回目以降6,000円/1作品
○アドバイザー2名による講評と校正及び
添削をした原稿を郵送します。
- 提出作品 原稿用紙50枚まで
(50枚を超える作品は要相談)
- アドバイザー 久保訓子、阿部あみ

作品の提出方法

縦書き文章で、Microsoft Word ソフトまたは PDF データの作品(400字詰め原稿用紙換算で 50枚まで)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

小説エキスパート講座

全国公募の文学賞で最終選考程度の実力の方やプロの作家を目指している方向け。作品を提出した上で講師からの指名があった方を中心に、本格的なスパーリングを行います。

* 未完成作品の提出はご遠慮ください。

- 開催日 ①8月30日(日) 13時～14時半
②11月7日(土) 21時～22時
③12月26日(土) 21時～22時
- 開催方法 ①『Zoom』+会場 同時開催
②③『Zoom』による開催
- 場 所 ①のみ シビックセンター4階 活動室3
- 参加費 作品提出: 会員3,000円/学生会員1,000円
参加のみ: 会員1,500円/学生会員500円
非会員2,500円 ※
- 提出作品 原稿用紙50～200枚
- 講 師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 締 切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれた小説(400字詰め原稿用紙換算 50枚から 200枚程度)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

初めてでも書ける書評講座

初心者の方が書評を書くときに気をつけるべきこと、書き方のノウハウをお伝えします。

- 開催日 9月13日(日) 21時～22時
- 開催方法 『Zoom』による開催
- 参加費 会員・非会員※ 1,500円
- 講 師 作家・四国大学教授 佐々木義登

冬の句会

冬の句会を行います。投句は冬の句を2句ですが、1句でも、聴講だけでも大丈夫です。

- 開催日 2027年1月23日(土) 19時～20時30分
- 場 所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員・非会員※ 1,000円
- 講 師 俳人・うっかり
- 締 切 1週間前までに事務局へ投句

民雄忌

ハンセン病と闘いながら文学に情熱をかけた阿南市出身の作家、北条民雄の功績を顕彰する会が開催されます。詳細については決定次第、徳島文学協会や阿南市からご案内します。

- 開催日 12月5日(土)

※非会員の方のご参加について

ご参加希望の方は事務局までメールでお申し込みください。

【ご参加の条件】

- ①Zoomの基本的な操作ができる(Zoom参加の場合)
- ②事前に参加費を支払う(振込手数料はご負担ください)

- 講座参加費と作品提出料は、後日とりまとめた上、請求書と払込取扱票を年2回お送りいたします。
- Zoomでの参加方法がわからない方は、無料でサポートいたします。お気軽にお問い合わせください。

徳島文学9号発刊記念親睦会

詳細は1ページをご覧ください。

- 開催日 8月30日(日) 15時～17時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催
- 場 所 シビックセンター4階 活動室3

お申込みについて

Zoom 参加の場合は3日前までに事務局までお申し込みください。会場参加の場合は事前申込は不要です。

ご入会や講座のお申込み・お問合せは 徳島文学協会事務局まで

〒771-3201 徳島県名西郡神山町阿野字方子 103

TEL : 080-6284-0296

<https://www.t-bungaku.com/>

